



ハイチ・ドミニカ共和国の国境市

■ フォトエッセイ ■

# 震災後のハイチを生き抜く人々

—2010年ハイチ大地震と復興への遠い道のり—

写真・文 浦部浩之  
Hiroyuki Urabe



震災前の大統領官邸（2003年）

震災で崩壊した大統領官邸







この広場は以前、富裕層の子どもたちが自転車を乗り回すなどして華やいでいた（2003年）



被災者の老夫婦が暮らすテントの内部（震災10カ月後）



この老夫婦は日本のNGOによる緊急援助で震災直後を生き延びた

二〇一〇年一月二日、西半球の最貧国ハイチを首都直下型の大地震が襲い、三十一万人以上（政府発表）もの人命が奪われた。全壊ないし大きく損壊した建物・家屋は三〇万戸を超え、避難を強いられた人は総人口の約二割に当たる二〇〇万人にのぼり、ただでさえ国民の五五%が一日当たり一・二五ドル以下の極貧生活を送っていたハイチは、「史上最大の人道危機」（国連高官発言）と言われるほどの極めて深刻な事態に陥った。

そのハイチに、被災者支援事業モニタリング・中間評価ミッションの一員として足を踏み入れたのは、震災一〇カ月後のことであった。空港からの道のり、目に飛び込んできたのは、いたるところに立ち並ぶ被災者のテント、銀色のトタンとブルーのシートで補修されただけの家々、倒壊したまま放置されている建物の数々、そして道端のあちこちにうず高く積まれた瓦礫の山。報道写真で見ているのが、無残に崩れた白亜の大統領官邸は震災の酷さを無言で訴えかけてくるようであり、被災者のテントで埋め尽くされた高級住宅地区ペチョンビルの中央広場は、前回二〇〇三年に訪れたときに目にした、この国にしては小奇麗で華やいだ風景からすっかり変わり果てていた。

ただ、想像していたのとは異なることもいくつかあった。訪問前、なんとなく頭に浮かんでいたのは、物資の窮乏と、打ちのめされて活気を失った町の光景。ところが、人々は路上や荷台に様々な品物を並べ、たくましく商売を営んでいる。その傍らを多くの人が、大きな荷物を頭に載せてせわしなく行きかう。人々の生命力というものを感じた。

町中のいたるところに、一カ月後の選挙に向けた、上質なカラー刷りの候補者ポスターがあふれているのにも驚いた。けっこうな資金がかかっているはずである。スーパーには棚いっぱい様々な輸入品が陳列され、高級レストランでは贅沢な食事も出されている。外国からの援助関係者がお得意様であるのが、ハイチ人の富裕層の利用も多い。この国に、お金も物も、ちゃんとあるではないか。素朴な疑問と矛盾を感じずにはいられなかった。

とはいえ、苦しい生活を送る多くの人のことを考えれば、差し当たり手を差し伸べないわけにはいかない。その





母親は乳幼児を抱え、朝から夕方までずっと自分の仮設住宅が建設されていくのを眺めていた



日本のNGOにより建設された仮設住宅。広さは18平方メートル



孤児院で、配給された水を飲む子ども。この孤児院は地震で全壊し、トタンとビニールの応急処置でしのいでいる

点で、草の根の活動が果たす役割はやはり大きい。たとえば水分野での支援。震災前の時点でハイチでは五八%の人が安全な水にアクセスできていなかった(国連)。ある村の湧水場を訪れてみると、同じ水源の水を、飲用水の汲み取りにも家畜の水やりにも洗濯にも使用している。衛生的によいはずがない。別の村では、いくつもあった給水ポンプが地震で軒並み破壊され、ようやく復旧を終えたところであった。安全な水の供給は、じつは教育の改善にも関係する。誰にでもできる水汲みは、途上国では一般に子どもの仕事だ。もし水を得るために何キロメートルもの道のりを往復しなければならぬのであれば、学校に通うこともできない。

現場には様々な苦勞もあるようだ。仮設住宅はいまだ不足し、各所で建設が進められている最中である。では、完成した住宅に、誰から入居させていけばよいのか。あるNGOでは、乳幼児や高齢者のいる世帯を優先させるなど、一定の基準を定めていた。ところが人々はその条件を満たすために、知り合いの赤ちゃんや老人を知人から借りて家族を装い、虚偽の申請をしようとするのだという。

震災二年後の二〇一二年一月、ハイチのことが気になって、ドミニカ共和国側から国境地帯に入ってみた。ドミニカ側がダボン、ハイチ側がオウアナメントゥという町。川一本で隔てられている。

毎週月曜と金曜に、ドミニカ側に市が立つ。朝早くから国境を越えて集まってくる人、人、人。押し合いへしあいだ。怒声も飛び交う。ハイチでは人口圧と貧困による環境破壊で農業生産システムが破綻しており、食糧のかなりを輸入に依存している。牛肉や鶏肉、卵、コメ、野菜、バナナといった農産物から菓子類や炭酸飲料にいたる様々な物資がここで買い付けられ、ハイチに運ばれてゆく。他方でハイチ人は衣類や靴、食器類などを、安値でドミニカ人に売っている。なお、農産物のなかではニンニクが、ハイチ側からドミニカ側へ供給される例外的な品目のひとつらしい。

不思議な光景を目にした。ハイチ人の女性が、おそらくドミニカ人を相手に、コメを売っている。ドミニカ共和国はコメの生産が盛んで、その自給率は九七% (二〇〇七年：FAO)。それに対し、ハイチでは、農業の停滞に





川の手前がドミニカ共和国、向こう側がハイチ。写真左300メートルほどのところに橋があるが、混雑を避けて、多くの人が素足で川を渡ってゆく



ハイチ人はドミニカ人に衣類や靴などを横流しして現金を得る

コメとニンニクを売るハイチ人女性。Miamiの文字がコメ袋にプリントされている



一九九〇年代半ば以降の関税引き下げ（それともなう穀物輸入の急増）が追い打ちをかけ、コメの自給率は二二％にまで低下している。

女性の売るコメの袋には「マイアミ」の文字がプリントされている。話によると、ハイチに届いた良質なコメと、粒が碎けて商品価値のなくなったドミニカ産のコメとが、おおむね一対二の比率で取引されるのだそうだ。「国境のあちこちで密輸が横行している。ハイチの兵士もドミニカの兵士も、賄賂を受け取って密輸は野放しだよ」。

ドミニカの農業生産は、少なからずハイチ人の労働力に支えられている。ダハボンでコメとレモンを生産しているある農家の場合、収穫の時期などの繁忙期には、一日二五〇〜三〇〇ペソ（六〜七ドル）の賃金で、数人のハイチ人を雇うという。ドミニカ人の六割程度の賃金ですむ。「誰かハイチ人に声をかければ、すぐに知り合いとかを引き連れて（国境の）向こう側からやってくるよ」。

二〇一二年六月現在、ハイチ国内にはまだ五七五カ所のキャンプに約三九万の被災者が暮らしている。二〇一〇年七月時点の一五五カ所一五四万人に比べると減ってはいるが、震災から二年半を経て今なお、復興への道筋は見えない。そうした国で、人々は必死に日々を生き抜こうとしている。

うらべ ひろゆき／獨協大学 国際教養学部教授

専門はラテンアメリカ地域研究・政治学。  
ラテンアメリカにおける民主主義や地域安全保障に関心。  
2010年11月、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームからの委嘱でハイチを訪問。